

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2025. 1. 7.
文責/JUN

あけましておめでとうございます 本年もよろしく申し上げます

これからの時代の教育を考える

1 教育のICT化が向かう先

新しい年を迎えて考えるのは、これから先の教育の行方である。

それは、もちろん、社会の変化と結びついたものである。社会に巣立っていく子どもたちを育てるのが教育の目的なのだから、その子どもたちが生きていくことになる社会の変化とつながるのは当然のことである。

その現在の社会、そして今の子どもたちが生きることになる20年後、30年後の社会はどういうものになるのだろうか。そう考えて浮かび上がるのは、今、世界が第四次産業革命進行中だということである。AI、ロボット、IoT (Internet of Things)、ビッグデータによって遂行される革命である。たぶん、このことについて、私たちは、新型コロナ前にはあまり意識していなかった気がする。それが、この5年間で身近に感じられるようになった。

駅の改札やスーパーやコンビニのレジはセルフ化されてきたし、注文した料理をロボットに運ばせているレストランも出てきた。自動車の無人運転が試験走行されているからそのうちにそういう車が公道を走ることになるだろう。国民が医療機関にかかった事柄はすべてデータ化されつつあるし、とにかく世の中がどんどんコンピュータによって制御されつつある。それが、私たちの感じる第四次産業革命なのだ。

学校教育への影響ということで実感するのは、ICT化とAIの導入議論だろう。AIの導入はまだ議論の段階だが、ICT化は急速に浸透してきた。ICT化に特化して導入しようとしている自治体はかなりの数にのぼるだろう。

そこで考えなければいけないのは、ICT化の進む向こうにどういった学校教育が存在しているのかということである。もちろんそこにAIについての議論も含めなければならない。なぜそう思うかと言うと、多くの教師は、タブレット端末を、文房具の一つとして、しかもとても便利なツールとして子どもたちに活用させているのだけれど、このまま活用を広げていくことで学校教育がどういった方向に進むことになるのかという行方が、もしかすると驚くようなことになるかもしれないのに、それが見えていないと思うからである。いわゆる「木を見て森を見ず」状態なのだ。

そこで、新しい年になったことでもあり、これを契機に、世の中全体のコンピュータ化をどう考えるべきか考えたほうがよい。そして、私たちは教師なのだから、教育のICT化はどこに向かおうとしているのか考えなければならない。ここでは、そのことについて述べてみようと思う。

2 「全ての子供たちの可能性を引き出す」という文言は？

文部科学省が出した「令和の日本型学校教育」に「全ての子供たちの可能性を引き出す」という文言が添えられている。このことに異議を唱える人はいないだろう。公教育の使命は、すべての子どもの学びの保障だからである。

では、それをどのように実現するかだが、それは、先の文言に続いて述べられている次の文言から読み取ることができる。それは、今や全国の教師たちに行き渡った「個別最適な学びと協働的な学び」である。

この二つは、まず「協働的な学び」の方から出された(以下、文科省から出された文言として示すときは「協働」と表記し、私個人の考えにおいては「協同」と表記する)。文科省が示した、子どもと子どもが対話的に学び合うことによって学びを深いものにすることができるという「主体的・対話的で深い学び」によって。

ところが、その指針の実施初年度が新型コロナに襲われ、この取り組みは頓挫した。そのとき、「オンライン授業」という考え方が必要不可欠なもののように登場し、それまでに検討されていた「GIGAスクール構想」の実施を前倒して、全国のすべての学校において「一人一台端末整備」が進められることとなった。そして、それと呼応するかのように経産省、総務省、文科省によって日本の教育の未来についての検討が進められ、そこから「個別最適化」という文言が登場した。しかも、その「個別最適化」と「ICT化」があたかもイコールで結ばれているかのように。私はそのように受け止めている。

「個別最適」ということは、読んで字の如く「学びがそれぞれの子どもにとって最も適したものになる」ということである。「適したもの」とは、「良質・良好なもの」と言ってよいだろう。

子どもの学びがもっとも良質・良好なものになるのに必要なことは多岐に亘る。何か一つのことを重視すればそうなるというものではない。「GIGAスクール構想」によって、すべての子どもに1人1台タブレットが与えられた、それは平等な措置であり適切な措置だった。しかし、それだけで「個別最適」になるわけではない。それは、「個別最適」な学びを生む一つの条件でしかない。つまり、「ICT化」と「深い学び」は、全面的にイコールで結べるものではないのだ。

現に、国際的な機関によって行われたコンピュータの活用時間と学習成績の相関において、コンピュータを活用すれば学力が上がるという結果は出ていない。むしろ、活用時間が多くなると下がる傾向が見られる。

そうすると、「令和の日本型学校教育」における「個別最適な学びと協働的な学び」の「個別最適な学び」をそのまま「ICTを活用する学び」と読み替えることはしてはならないということになる。つまり「ICTを活用する学び」をすれば、「全ての子どもの最適な学び」が実現するということは幻想にすぎないのだ。

ただし、それは、「ICTを活用する学び」を全面的に否定するものではない。

コンピュータで行う学びが効率的だと言われているのは、学習材をスモールステップに組み立てて示し、その回答に対して即時フィードバックする仕組みによるものである。しかし、そういう直線的なスモールステップでは、筋道にはないものを見つけるとか、新しく創る、または何かの事象につい

て探究的に考えるというようなことはかなり難しい。探究的学びは、時としてこれまでなかったような考えを生んだり、これまで陥ったことのない「分からなさ」に迷い込んだりする。だから、そういう学びは、コンピュータに従う直線的な学び方で行うことはできない。もし今後、AIに制御される学び方が登場したら、それは子どもが思考し発見する学びではなく、制御に従う学びになるのだから、さらに創造的・探究的なことはできなくなると考えざるを得ない。

ただし、創造的・探究的学びにおいてコンピュータは全く活用できないかという点、それはそうではない。コンピュータが示すスモールステップに従って知識を得る使い方ではなく、大量のデータ・情報を有するコンピュータの機能を探究的学びに生かす活用をすれば、生まれる学びは広く濃い内容に支えられたものになるからである。

ここまで考えてきて、この節の標題とした「全ての子どもの可能性を引き出す」ということについてだが、それは、ただ「ICT化」さえすれば実現するとは考えられないということがはっきりしたと言えるのではないだろうか。

だから、すべての子ども一人ひとりに1台ずつ配備されれば、すべての子どもの学びが深まると直線的に考えるのではなく、次の2点に留意する必要がある。その一つは、この後述べることだが、協同的学びによって探究的な学びに取り組むことである。そしてもう一つは、前述したように、ICT機器を探究的学びで活用する学びを行うことである。それこそが、「令和の日本型学校教育」で謳われた「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」である。

ここで生成AIについても書いておこうと思う。生成AIで文章をつくることの是非が問われているからである。言葉には人格が宿っている。もちろん、絵画にも、彫塑にも、趣味で制作する物にも、とにかく人がつくるものすべてに制作した人の人格が表れる。けれども、言葉ほど重要なものはない。言葉は人を表すとされるほどである。だから、その大切な言葉における属人性が、AIに頼ることで壊れてしまうのではないかという底知れない恐れを感じる。

誰でもできる、しかも早くできる、そのことで失われるのは、人格であり、人間らしさであり、一人ひとりの唯一無二なる存在ではないのだろうか。

私には、これから進歩していくAIがどれほどまでのものになるのか予測もつかない。

だから、ここで、断定的に述べることはできない。

一説によれば、やがて、人間が及ばないほどの存在になるとも言われるが。

だれでもそうだと思うが、私は文章を書くときずっと考え続けている。そもそも何を書きたいのか、そのため、どういう事柄を取り入れるか、文章は、いくつかのまとまった部分のつながりだから、それをどういう順序、組み立てにするか、そして、自分自身が書き表したいことは、そこにどういう言葉を持ってきたら表せるのかと、膨大な言葉群の中から選び出し、その選び出した言葉をどうつなげて文としての味わいを出すか考え続ける。その途中、思考の迷路にはまり込んで、何時間も求めるものを探し続ける状態になることは度々だ。このように文章化の実際を思い起こして感じるのは、書くことは、人として生きる自分自身の在り方を考えることにつながる。自分を見つめ、まわりをみつめ、今をみつめ、これからを見つめる、それは極めて人間的な営みだ。だから、改めて強く思う。私たち人間は、この極めて人間的な営みを決して放棄してはならない、なくしてはならないと。

便利なこと、効率的なことで、人は、とても楽になる。私もその恩恵にあずかっている。デジタル化された今の世の中と私が生まれた頃とは雲泥の差である。しかし、幸いなことに、今は、「きわめて人間的なもの」を壊すところまでのものにはなっていない。しかし、生成A Iには、その聖域を壊してしまう恐れを感じる。

これからの時代は、私たち人間の意識・良識が問われる。人間らしさ、人間として生きることをどう考えるのか、そして、この人間社会をどういうものとして持続させたいのか、そういう私たちの見識が問われる。

生成A Iを原子力と一緒に考えることは穏当でないかもしれない、人命に直接かかわらないのだから。けれど、原子力で危惧されているのと同じように、生成A Iが人間らしさを壊してしまうようなものになってしまったら取り返しのつかないことになる。だれもができるという平等性、そして、苦勞を伴わない便利さ、効率性を望むがあまり、一人ひとりの唯一無二なる存在をなくす均一性、等質性に陥ってはならない。それは、一人ひとりの人格、人間らしさをなくすことになるからだ。

もしかすると、この「たより」を読んでくださる皆さんは、私ほどの危機感を抱いておられないのかもしれない。それはI C T化、生成A Iの向かう先が未だはっきり見えていないからである。それは、逆に考えれば、これから先の人間の対応によってよい方向に向かわせることができるということにもなる。ここで述べた私の危惧が取り越し苦勞になることを祈っている。

3 個別と協同(協働)

「個別最適な学び」について、教師たちの間で議論になっていることがある。それは、「自由進度学習」という学び方についてである。

「自由進度学習」というのは、私なりの把握で言えば、教師が示す学習内容に対して、どこからどのように取り組むかを子ども一人ひとりが考え、自ら計画を立てて、自分に合った進度で学習する学び方である。これは、「個別最適な学び」の説明において述べられている「学習の個性化」を具現化する一つのあり方として出されたものだと思う。「自由進度」と言うからには、同じ学習内容だけれど、子どもによってその時々でどういうことに取り組んでいるかが異なる状態になる。それは、日本の教育が長く続けてきた「一斉授業型」とは大きく異なる学び方である。

この学び方に対して起きている議論とはどういうものかということだが、それは文科省が示している「協働的な学び」との比較でというより、これまでずっと「一斉授業型」でやってきた教師からすると、一人ひとりばらばらにそれぞれの進度で学ばせる、そのようなことができるとは思えないということなのではないだろうか。何人もの子ども一人ひとりが、みんな進度が異なっている、その異なりに応じて、一人の教師でどのように指導できるのだということなのだろう。このことについては、「自由進度学習」を進めている教師には、それなりの方策があり、それぞれにおいて取り組めるような措置を講じておられると思う。そうでなければ実現不可能だからだ。

私がここで述べたいのは、教師側の論理ではなく、学ぶ子どもの側に立って、どの子どもにとっても可能なのか、そこで生まれる学びの質はどうなるのか、などということについてである。

学びには「分からなさ」や「間違い」が伴う。内容の深い課題であればあるほどそういう状態が起

きる。そして、そこを乗り越えていくことによって学びが生まれる。さっさと分かる、あるいは解決できる、そういう課題だと、無事やり終えたとしてもそこにたいした学びは生まれないと考えてよい。学びは、すぐにはできないことに取り組むことによって生まれるものだ。そういう学びをすべての子どもに対して具現化しようというのが「令和の日本型学校教育」の理念なのではないだろうか、そう思う。

そうだとすると、どう考えても「自由進度学習」だけで、すべての子どもの学びが保障できるとは思えない。すべての子どもに「個別最適な学び」が保障できるとも思えない。そう考えて気づくのは、だから、「個別最適な学びと協働的な学びとの一体化」なんだということである。それは、「自由進度学習」に取り組むとしても、すべての学習を「自由進度」でするのではなく、「協働的」に学ぶ学習と組み合わせるということを示しているからである。

もちろん、「自由進度学習」は「個別最適な学び」の学び方として出てきたものだと思うが、両者はイコールで結ばれるものではない。「協働的な学び」のなかでも「個別最適な学び」が実現するからである。いや、私から言えば、「協働的な学び」をしなければ「個別最適な学び」は実現できないのだ。

「協働的な学び」は主に、グループとかペアで行う。しかし、協働的に学ぶのは、グループやペアで一つの答えを出したり絞ったりするためではない。一人ひとりの学びを深めるために他者と学び合う、それがグループやペアなのだ。だから、私は、「分からなさ」を尋ねることのできるグループ、尋ねられたら寄り添ってともに考えることのできるグループに育てなければならないと考えている。それが「協働的な学び」の基盤だからだ。そうでなければ、すべての子どもの学びにならない。

そういうグループやペアで学び合えば、どの子どもも「分からなさ」を克服したり、「間違い」のわけを見つけたりすることができる。もちろん、何人かで考え合えば深い学びも生まれる。

つまり、「協働的な学び」によって、一人ひとりの学びが「最適」になるのだ。だから、ICT化がそうであったように、「自由進度学習」さえすれば「個別最適な学び」になると直線的には考えられない。「自由進度学習」イコール「個別最適な学び」ではないのだ。「個別最適な学び」の中に「協働的な学び」があり、「協働的な学び」の中に「個別最適な学び」があるからである。

それは、学校の学習のあり方だけで考えるのではなく、私たちの日常生活でのことで考えればすぐ分かることである。

人は、一人でいたいとき、一人で考えたいときもあれば、だれかと一緒にいたいとき、だれかと話したいとき、だれかに相談したいときがある。

自分の中に、自分がいるし、何人もの他者も住んでいる。

その区分けは、あるようでないような気がする。

自分一人でいたい、一人で考えたい、一人で楽しみたいと思っていたはずなのに、いつの間にか誰かの存在が浮かび上がる、逆に、何人もの他者と一緒に何かをしている最中に、ふっと一人になりたくなる、つまり、自分と他者とは隣同士の存在として出たり入ったりしている。幸福感を感じて落ち着いた気分になれるときは、その関係性が無理なくできているときなのではないだろうか。

そういう意味では、「個」と「他者」、「個」と「集団」の関係性は、人として生きていくに際して、いつも存在しているものであるとともに、人の生き方を大きく左右している。

「令和の日本型学校教育」で出された「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係性も同じこと

である。別に新しい概念ではない。表現の仕方が異なるだけである。学びにおいても人としての生き方においても、「個別に最適にする」と「他者と協働する」とは、深くつながり乗り入れ合っていることなのだ。

皆さんも、皆さん自身の日々を、その時その時の状況に応じて、さまざまにしておられるに違いない。だから、学びもその時どきによって、もっとも適した学び方ができればよいのだと思う。

ただし、その際、二つのことを心しておかなければならない。その一つ目は、「協同的学び」に積極的に取り組むべきだということである。「自由進度学習」も「一斉授業型」からの脱却になるが、他者とともに学ぶことで深い学びが可能になる「協同的学び」こそ必要不可欠なものだからである。しかし日本の教育がこれまで「一斉授業型」にどっぷり浸かってきたことを考えるとかなり意識的に取り組まないとできていかない。「協同」は、学校教育においてだけ大切なのではない。人は一人では生きていくことはできない。「協同」の場を設けることは子どもたちの未来に対する私たちの責任なのだ。

そしてもう一つ心したいこと、それは、どういう学び方を行うとしても、それが子どもにとってもっとも適した学び方かどうかを判断することである。それには、教師目線ではなく、子どもの側からみつめなければならない。秋田喜代美先生は、子どもの側からの見方を「子どもの内側からのまなざし」とおっしゃっておられる。その「まなざし」がなければ、その時その時にどういう学び方をするべきかの判断はできないのだ。教師の子どもに向ける「まなざし」は大切である。

4 協同的学びによる探究に取り組む教育に

ここまで述べてきたことへの教師たちの理解は、個人的な感覚で言うと、かなり深まってきていると思う。教師が教える、子どもから言えば先生に教えてもらうことになるが、そういう学習から、子どもが取り組む学びに転換しなければという意識が広がってきているからだ。

とは言っても、学校の出来事を報じるテレビ画面に映し出される教室風景は、いつまでたっても、すべての机を一つずつ前向きに並べたものばかりだ。それが国民の大部分が抱く学校のイメージだからだろう。でも、私の近辺では、そうではない教室が以前と比べて増えてきている感じがする。

ただ、明治以来ずっと行われてきた「一斉授業型」から脱却することは簡単なことではない。積極的な取り組みがあちこちで行われているのだけれど、全体的な進捗状況は鈍いと言わざるを得ないからだ。「一斉授業型」のスタイルが教師の体に染みついているのだ。それが証拠に、「学校全体でグループによる協同的学びを推進する」と取り決め、すべての教室でグループによる学びを始めたにもかかわらず、これまでと同じ進め方しかしていない教師がいたり、グループにしてはいるのだけれどただ子ども任せにしているだけの教師がいたり、一方子どもはと言えば、先生の指示がないとどうしてよいか分からず、学習内容が分かっているにもかかわらず、ただグループの中でじっとしているという状態も見られるからである。

そういう状況を目にすると、先生たちに、探究的学びとはこういうものだ、探究的学びになれば子どもたちはこんなふうになる、そういう実像を見てもらいたくなる。見てもらって、それがどういうことなのか説明すれば、何とかしたいという思いを持つ教師ならきっと心に響き、そのようにしてみようと思うに違いないからである。

教師たちに、探究的学びにはどんな魅力があるのか、それは子どもにとってどれほど大切なものな

のか、それを知らせたいと、こんなにも私が願うのはどうしてなのか、この文章を読んでもくださる皆さんはそう思われるかもしれない。

それは、これから先の学校教育、つまり、教育のICT化の向かう先を思うからである。

だれもが感じていることだけれど、世の中が便利になればなるほど、人間の中の何かが必ず衰えていく。小学生の体力が年々落ちている事しかり、文章表現力の低下もしかり。人は、ああではないか、こうではないかと考えること、分からなさに向き合うこと、できない苦しさや失敗を経験すること、そして、自らの頭や手足を使ってやってみることで機能が鍛えられ学びも生まれる。便利になるということは、そういうことから遠ざけられることになるのだ。

基本的に、コンピュータは、ビッグデータの蓄積があつていろいろな機能を発揮する。膨大なデータを仕分けし、つなぎ、そこから最適なものを見つけ出す、それを一瞬でやってのけるのがコンピュータなのだ。その恩恵を受ければ、私たち人間は楽しいいろいろなことが分かるし、できる。しかし、そういうことだけになると、これまではなかった出来事、これまではないもの、これまではない考え方には対処できなくなる。つまり創造性が衰えるということだ。

そのこれまではないこと、それを「未知なるもの」と名づけるとすると、その「未知なるもの」に取り組むには、あるいは「未知なるもの」を生み出すには、私たち人間の知恵と知能こそ必要なのではないか。その際、もちろん、コンピュータが出してきた情報は使えばよい。コンピュータが出してきたものをどう組み立てて、そこから何を考えつくか、どういうものをつくり出すか、そこで「人間力」が発揮される、そう思う。つまり、人間は、コンピュータに頼り、コンピュータ任せになるのではなく、コンピュータを活用する存在にならなければならない。

これからは、「コンピュータ」と「人間性・人間力」という二つが対峙する世界になる。そのとき、私たちが忘れてはならないのは、私たちが人間としてどう生きるかということである。唯一無二の私自身がどんな人間として育ちたいかということである。そう考えれば、それはコンピュータに頼る、もっと言えばコンピュータに支配される生き方にはならない。

自分で考えたいじゃないですか。自分で「こういうことなんだ」と気づきたいじゃないですか。これまでにない物をつくってみたいじゃないですか。自分が生きた証のようなものがあつたらどんなにいいだろうと思うじゃないですか。そう考えると、これからの教育の向かう先で大切なのは、ICTに頼るよりも、私たちの「人間性・人間力」なのだと考えられてくる。

その「人間性・人間力」に存在するのが、自ら考えたり取り組んだりして何かを生み出そうとすること、それを一言で言い表すと「探究的生き方」ということになるのだと思う。そして、そのように生きるためになんとしても必要なのが、「他者とのつながり」なのだ。一人ではない、自分にはつながり合える他者がいる、それはコンピュータではない、心を通わせ合いともに生きる他者だ。そのことを一言で言い表せば、「協同」または「協働」ということになるのだろう。

第四次産業革命の時代だからこそ必要なもの、大切なもの、それは、「人間性」であり、「探究」と「協同」なのだ。そして、それは、ICT化の恩恵に与る日々を送るとしても、ICTとは真逆の非効率性の中に存在するというのを忘れないで、生き方の中に必ずそういう世界を持っていたい。

私たちが学校の授業を「協同的な学び」に転換するということには、これだけの意味があるのだ。その取り組みが、今年、さらに拡大するにちがいない。それだけに、大切な年になる。

その大切な一年が、始まったのだ。

「伴走者」になるということ

昨年12月に参加した学校づくりの研究会は、ずっとアドバイザーとして招いてもらっていた会である。今回で5回目を迎えたのだが、私のアドバイザーとしての役割は今回で終了になると知らせてもらっていたので、私は、万感の思いを抱いて参加した。

会の最後、私に1時間という時間を設定していただいていた。私は、その1時間を、どんなものにすべきか、何日も考えた。その結果、「次の世代につなぐ」ということ、その一方、「どこまでも私自身をまっとうする」ということ、この二つについて聴いていただこうと決めて臨んだ。

「次の世代につなぐ」ために、私が話さなければいけないと思ったのは、これからの時代を生きる教師たちにとってもっとも必要なのは、指導者ではなく「伴走者」なのだということだった。

今、教師たちがめざしている子どもの学びは、「教えてもらう勉強」ではなく、「子どもが自ら取り組み、探究し、発見する学び」である。それは「子どもを学びの主人公に」というキャッチフレーズで語られている。

だったら、そういう教育を牽引する教師たちも、「指導を受ける」という意識ではなく、「授業をつくる主人公は教師である自分だ」という意識であるべきだ。それは、以前から言われている「アクティブラーニングは教師がアクティブラーナーにならなければ実現できない」ということと同じである。そう考えていた私は、研究会に参加された方々に「私たちは、教師たちの伴走者になろう」と語り掛けたのだった。

そこで考えなければならないのは、「アクティブラーナー」になる教師たちと「ともに走る」とは具体的にどうすることかということである。

まず、大切なのは、その教師がどこに向かって走ろうとしているか(何を目標にして授業しようとしているか)をとらえることである。次に、走り出した(授業が始まった)ら、走る教師と同じ景色(学ぶ子どもの姿)を見るよう努めることだ。そういう見方をすれば、走っている教師の走り方(授業のあり方)も見えてくる。その際、走る教師の迷いや不安感といった心情的なものも感じられてくるはずだ。それは、とどのつまり、学ぶ子どもの事実、子どもが紡ぎ出す学びの事実を、授業をする教師の目線で感じとるということではないだろうか。だから、私は、「伴走」という言い方をしたのだ。

上から目線が強い「指導」では、教師たちは「アクティブラーナー」にはなれない。教師にとって心強い他者は、寄り添ってくれる人、それが「ともに走ってくれる人=伴走者」なのである。

最後のメッセージとして表したかったもう一つのことである「私自身をまっとうする」ことについては、ほとんど触れることはしなかった。それは、私もまた「生涯伴走者であり続ける」ことなのだが、そのように直接口にしなくても、なんとなく感じてもらえればよいことだと思ったからである。

この会における私の役目はこれで終えることになった。寂しい気もするが、以上のことを聴いていただけたという思いが湧き出て、ほっとした安堵感がからだの中に広がった。

私は、1年半前に上梓した『「学び合う学び」を生きる』(ぎょうせい)の最終章で、学校に足を踏み入れるには、「覚悟がいる」ということを書いた。研究会におけるこの1時間は、私自身の「覚悟」を確かめることにもなったと思う。

私自身のあゆみは止めることはない。これからも、子どもたちや志を同じくする教師たちとの出会いを楽しみに、急がず、丁寧に歩みたいと思う。……さあ、新しい一年の始まりだ！！